

# オンライン講演会 「中国の小豆生産の実態調査 中間報告」の開催結果

(公財)日本豆類協会

日本豆類協会では、我が国にとって小豆の主要輸入先国である中国における小豆の生産・流通・消費状況について、これまで調査を実施してきましたが、令和7年度にも中国在留の専門家の協力を得て調査しています。今般、調査実施者からオンライン配信（Zoom）により中間報告していただく講演会を次のとおり開催しました。

日時：令和7年9月8日(月) 14:00-15:00

演題：中国の小豆生産の実態調査 中間報告

講師：一般財団法人日中経済協会北京事務所副所長 山田智子氏

8月13日から9月4日までの間、協会ホームページで案内したところ、豆類の貿易・流通、実需の企業を中心に、大学・研究機関の研究者、生産者、県や国の行政関係者、マスコミ等から42名の参加がありました。

講師の山田氏は、2004年4月に農林水産省入省、2008年9月に上海交通大学管理学院留学（組織管理専攻で修士号取得）、2023年6月に現職に出向（一般財団法人日中経済協会北京事務所副所長兼農林水産・食品室長）し日本産農林水産物・食品の輸出支援業務に従事されています。

山田氏は、まず、小豆の中国での位置付けについて消費面の実態からアプローチし、その後、中国の小豆生産、輸出入の概況を説明した後、小豆生産の事例として動画をまじえながら吉林省および黒竜江省の現地実態を報告、現地での流通の概況に言及されました。

## 目次

- 1 小豆の中国での位置付け  
(消費)
- 2 中国の小豆生産、輸出入の概況
- 3 小豆生産の事例  
(吉林省、黒竜江省)
- 4 流通の例
- 5 小括

まとめとして、

- 小豆の専業生産者は稀。栽培作物としても2番手以降の選択肢となることが多いこと
- 「2番手」とは、コストや販売見込み価格、他の作物への補助金の額などを考慮した結果、他の作物よりも収益が見込めると判断された場合は栽培される、という意味であること
- 東北地方、特に黒竜江省の生産量が多い理由は、土壌（黒土）が良く病害虫の被害が少ないため、肥料や農薬散布のコストを低く抑えられること、大規模農業地域で農業機械も他の作物と兼用でき、低コストでの生産が可能であること

を説明されました。



以上の説明に対し、次のような質疑が行われました。

(質問) 日本では小豆の栽培に関して、高温、干ばつなどが問題となっているが、中国の小豆栽培では何が問題となっているか。また、それに対する対応状況はどうか。

(回答) 最近中国の農作物栽培に関して話題になっている懸念事項は、集中豪雨、あるいはこれまで雨が降らなかった時期に少なくない量の雨が降ってしまう、ということである。今日ご説明した吉林省の農家がコウリャンを植えた畑で小豆を植え直した理由も、コウリャンを植えた後に想定外の雨が降ってしまい発芽状況が悪かったから、ということであった。

このような気候の変化について小豆栽培で何か対応するか、ということについて、日本のように新しい品種を開発するような動きにはなっていない。特に東北地方の農家は自家消費用の小豆も栽培しているため、不作によって売れる価格が高くなれば自家消費費用を販売用に回すだけであり、積極的に新

品種を導入したいという熱意も希薄な模様である。一農家の生産量が多いため同じように自家用を販売用に回す行動を多くの農家が取っただけである程度の量が集まり、市場の需給への影響が少ない。中国産より安い外国産を輸入して中国産の質の良いものを輸出に回す、という形での需給調整も行われている。

小豆の需給はこのように市場でバランスが取られるような状況であるため、気候変動に対して小豆の生産現場で特段の対応をするというような状況にはないと理解している。

この調査については、さらに、各調査対象事例の収穫の状況を調査するとともに、「共同購入」の対象となる小豆の栽培・管理の状況などを調査・分析して最終報告に繋げることとしています。

なお、山田氏には、9月4日に帯広市にて開催された豆類需給安定会議・豆類産地懇談会・豆類生産流通懇談会においても同様の中間報告をしていただきました。